

屈辱の羞恥罰走。バスケ部女子がおっぱい丸出しで、運動場を走らされる

「どうしてこんな簡単なプレーでミスするのっ」
体育館の中に、女子バスケ部顧問の女性教師の甲高い声が響き渡った。

「すいません」

しかられた選手がすぐに謝る。

「あなた全然反省してないでしょ」

女バス顧問の女性教師、田中真央が冷たい口調で言う。

「すいません」

S 高校女子バスケ部の 2 年、瀬口綾香が小さく言った。

「瀬口さん、罰としてグラウンド 10 周走ってきなさい」

「わかりました」

瀬口綾香はそう言い、走り出そうとした。

「あ、待って。ただ走るだけじゃ全然罰になんかならないわよね」

瀬口綾香は立ち止まり、不安そうに顧問の田中真央の方を見ている。

「上は全部脱いで、上半身裸で走ってきなさい」

田中真央がそう指示した。

瀬口綾香は表情を無くしたように茫然としている。

「何しているの瀬口さん、早く脱いで走ってきなさい」

田中真央が冷たく言い放す。

N 県の名門私立高校 S 高校の体育館の中は静まり返っていた。

この日、体育館で練習していたのは、女子バスケ部のみだった。

女子バスケ部の部員は全部で 38 人いる。

その全員が固唾をのんでいた。

S 高校はスポーツの名門校で、女子バスケ部も毎年のように全国大会に出場している。

顧問の田中真央は女子バスケ部の顧問として 10 年、チームを率い続けている。

かなりのスパルタで、令和のこの時代に反するような厳しい指導を続けていた。

それでも、しっかりと結果を残しているのも、部員はもちろん、学校側も誰も田中真央に表立って注意する者はいなかった。

これまでも、体罰的な厳しい指導はいろいろとあったけど、さすがに部員全員がこれはまずいと思っていた。

上半身裸でグラウンドを走らせるなんてありえないと内心思っていた。

それでも、誰も田中真央に反論する者はいなかった。

そんなことできなかった。

反論したりすれば、自分自身が標的になるかもしれないからだ。

顧問の田中真央の権力は絶大で、その指示はすべて守らなければいけないものだった。

「何してるの瀬口さん。早く脱ぎなさい」

田中真央が瀬口を追い詰める。

「でも………」

「でもじゃないの。早くしなさいよー」

田中真央が再び大きな声を出して、瀬口綾香が体操服を脱ぎ始めた。

上を脱いで、黒のスポーツブラが露わになった。

今、この体育館の中には、男子は誰もいなかったけど、大勢の前でブラ姿を晒すだけでも瀬口綾香はとても恥ずかしかった。

「さー、ブラも脱ぐのよ。じゃないと罰にならないでしょ」

田中真央がいらいらした様子で言う。

瀬口綾香は覚悟を決めるしかなかった。

背中に手を回して、後ろのホックを外した。

瀬口綾香が体育館の中でおっぱいを露わにした。

形の整った、おわん型のおっぱいが現れた。

大きさは C カップほどで、乳首の色は薄茶色だった。

「じゃあ、走ってきなさい。じゃあ、他のみんなは練習再開するわよー」

田中真央が瀬口綾香にそう言った後、練習再開を部員たちに告げた。

瀬口綾香は口を真一文字に結んだあと、体育館からグラウンドに出る出口の方に駆けていった。

この日、S 高校のグラウンドでは陸上部が活動をしていた。

S 高校は名門スポーツ校なので、野球部やサッカー部などは、専用のグラウンドがあった。だから、そういった部活の部員たちは、専用のグラウンドで活動している。

今、この時間、グラウンドで活動しているのは陸上部のみだった。

陸上部は男女が半々くらいで、40 名ほどがいる。

陸上部もやはり全国大会で上位に入る選手が何人もいる名門だ。

グラウンドで練習している陸上部の男子部員が、遠くの体育館の方から走ってくる 1 人の女子を発見した。

よく見ると、上の服を着ていないように見えた。そんなことはあり得ないと、もう 1 回目を凝らして見てみたけど、やはり上の服を着ておらず、上半身裸のようだった。

遠くの方から、どんどん近付いてきている。

両手を前の方に出して、胸の部分を隠すように走っていたけど、どう見ても、上は何も着ていなかった。

「なー、ちょっとあれ、なんかヤバくない」

陸上部の男子は、近くにいた別の男子部員に声をかけた。

「何が？」

声をかけられた陸上部の男子が、向こうから近付いてきている女子を見定めた。

「いっ。何あれっ。上、裸？」

他の陸上部員たちも異変に気付き始めた。

陸上部員たちの視線が瀬口綾香に集中する。

「やべ。おっばい、揺れてるじゃん」

「手で隠そうとしてるけど、隠れきれてないよな」

「あれ、何年生だ？女バスだよな」

「あれ、2年の瀬口です。っていうか俺、同じクラスなんですけど」

「また女バスの体罰かな。女バスのあの顧問、ヤバすぎ」

「おい、お前ら。何見てんだ」

陸上部顧問の平川隼人が、騒いでいる部員たちに言った。

「先生、あれ見てください」

陸上部員たちが指さす方を平川隼人が見た。

上半身裸で、女バスの瀬口綾香がトラックを走り始めている。

手で乳房を覆い隠すようにして走っている。

ボクサーのファイティングポーズみたいに、右手で右乳を、左手で左乳をなんとか隠しながら走っている。

陸上部顧問の平川隼人は、これはさすがにやりすぎではと思いつつも、真央ならやりかねないなと思っていた。

陸上部の顧問、平川隼人と、女子バスケ部顧問の田中真央は夫婦だった。

この学校で出会い、教員同士で職場結婚をした。

数年前に結婚していたけど、田中真央は旧姓のままで仕事を続けていた。

平川隼人は、妻である田中真央の性格は当然

よく知っている。

妥協を知らぬ性格で、自分に対しても他人に対しても厳しい。

それが最大限発揮されるのが、部活で指導しているときだった。

これも真央の指導の一環なんだろうなと平川隼人は思った。

実績を上げている真央のことを学校側も容認していたので、夫である平川隼人が、グラウンドを上半身裸で走らせる、この罰走を止める理由はなかった。

「おい、みんなー。これは女バスの指導の一環だろうから、気にすることなく練習するぞー」顧問の平川隼人がそう声をかけると、陸上部の部員たちは練習を再開した。

でも、みんなグラウンドを黙々と走っている瀬口綾香のことが気になっていた。

特に陸上部の男子部員たちは気が気じゃなかった。

同じ高校に通っている女子が、上半身裸で恥じらいながら、すぐ近くを走っている。

しかも、瀬口綾香と同じ学年の2年の男子や、同じクラスの男子もいた。

気にするな、見るなという方が無理だった。

男子部員たちはこの光景をなんとかして見ようとしていた。

ようやく瀬口綾香が1周目を走り終えた。

「やっと今月中には文集が完成しそうだなー」

「そうですねー、苦勞した甲斐がありますね

一」

下足室の方から 2 人の男子が外に出てきた。
文芸部の男子 2 人だった。

1 人は文芸部部長の 3 年の田川で、もう 1 人は文芸部 2 年の村島だった。

文芸部の 2 人は、今日の活動を終えて、帰ろうとしているところだった。

グラウンドでは陸上部がいつも通りに活動していた。

「あれ？おい、あれ」

田川がグラウンドを指さしながら言った。

「どうしたんですか？」

村島が尋ねる。

「ヤバい。ありゃすごいぞ。もっと近くで見ろぞ」

田川がそう言い、いきなり走り出した。

「どうしたんですかー、田川先輩」

村島はそう言いながら田川の後ろを走ってついていく。

村島もようやく事態を理解した。

グラウンドの外周を 1 人の女子が走っている。その光景自体は、よく見る普通の光景だったけど、その女子は上を何も着ていなかった。

よくよく見てみるとその女子は、村島と同じクラスの女子、瀬口綾香だった。

同じクラスの女子が、上半身裸で学校のグラウンドを走っている状況に、村島の鼓動は早く、熱くなった。

グラウンドのすぐ近くまで来たところで、田川は足を止めた。